

聖書:創世記49章29節～50章14節

説教:カナンの地に掘った墓に葬る

はじめに

週報に記してあるとおり、11月22日に臨時信徒総会を開き、墓碑の建設について神のみこころを求めたいと願っております。そこで前回に引き続き、聖書においてお墓がどのような意味があるのかをともに考えてまいります。

日本では少子高齢化と言われる前まで、長男が父親の仕事を継いで家を守り、先祖代々の霊が眠るお墓を守ることが最も大切なことであると考えられていました。ところが最近では家を継ぐという考えがどんどん薄くなり、子どもは親元を離れて遠くに住むのが当たり前になり、お墓を守ることが難しくなる。その結果、「墓じまい」ということが言われるようになってきました。石材屋さんに聞くと、これからはお墓を新しく建てることは少なくなり、お墓を壊して更地にする仕事の方が増えるだろうと言っていたくらいです。

ではキリスト者はどうなのか。聖書によれば、私たちの国籍は天にあります(ピリピ書3章20節)とされているのですから、どのようなお墓であろうか、あるいはどこに葬ろうがそれぞれの自由である、という言い方もできると思います。しかし聖書には、お墓にこだわった信仰者たちがいたことも書かれている。それはどうしてだったのか。今日はヤコブに目を留めて考えます。

1 ヤコブの生涯

1) 争う子どもたち

ヤコブのことは、一月前にミヒヤエル先生が取り扱っていただきましたので覚えておられる方もいるかもしれません。彼は長子の権利のことで仲違いをしてしまった兄エサウとの和解を果たすことによって、かつての自己中心的な人から練られた信仰者に変えられていきます。しかし、すぐれた信仰者だからと言って、子育てもすばらしいとは限りません。ヤコブには十二人の子どもがいたのですが彼らは大きな問題を抱えていました。十一番目の子であるヨセフが兄たちに向かって何度も生意気な口を利いたことから、兄たちは怒り、ヨセフをエジプトに売り飛ばしてしまい、父にはヨセフは獣に襲われて死んだと報告した。ヤコブにとってヨセフは溺愛するほどのかわいい息子でしたから、これを聞いて非常に落胆してしまいます。

2) エジプトに逃れる

いっぽう、売られたヨセフはときには使われていた主人に裏切られて牢屋に投げ込まれるという苦勞を味わいながら、あるときファラオの見た夢を解き明かしたことがきっかけとなって、やがてエジプトの大臣にまで出世をしていきます。あるときイスラエルが大きな飢饉に襲われ、兄たちが食糧を買うためにエジプトにやってきます。兄たちを見つけたヨセフは、非常に複雑な感情で揺れ動くのですが、最後は兄たちと和解し、父ヤコブをエジプトに呼び寄せ、やがてヤコブの臨終の時に息子たちを呼んで遺言をしていった。それが49章までの流れです。

2 ヨセフ

1) 遺言を果たす

ヤコブの遺言はこうでした。49章29節。「私は、私の民に加えられようとしている。私をヒッタイト人エフロンの畑地にある洞穴に、先祖たちとともに葬ってくれ。」この洞穴とは、アブラハムが妻サラを葬るためにヒッタイト人エフロンから金を払って買ったものであったことは、前回見てきたとおりです。

さて、ここで考えます。なぜヤコブはあの洞穴に葬ってくれと遺言したのか。すぐに思いつくのは、ヤコブも語っているように、あの墓には先祖たちや自分の妻レアが葬られているから。自分も先祖代々の墓に葬られなければならない。そこでヨセフは遺言どおりにわざわざイスラエルに出かけて父親のなきがらを墓に葬った。

2) ヨセフの立場

もしそうであるなら、日本の古い文化とそっくりです。まことにヨセフは親孝行な息子であった、という話しになる。本当にそうでしょうか。

ヨセフの立場を考えてみてください。彼はエジプトの大臣ですから、ほとんどのことは自分の決意で仕事を進めることができます。しかし、父親を葬るためにエジプトを出国するとなると、自分ひとり飛行機に乗って帰るというわけにはいかない。彼はあくまでもエジプトの高い地位にある大臣であり、国外に出ればエジプトを代表する外交官でもあるわけです。随行員がたくさんいる。7節と9節にあるとおりです。「また、戦車と騎兵も彼とと

もに上って行ったので、その一団は非常に大きなものであった。」

こうなれば自分だけでは動けない。4節以降でヨセフはファラオの決済を仰いだということになる。

3) ヨセフの信仰

しかしそれだけではない。問題を複雑にするもう一つの要素がありました。彼はエジプト人ではありません。外国人です。こういうときファラオはあらゆるリスクを考える。ヨセフは、父親を葬ることを口実にしてイスラエルに向かうふりをしながらエジプトの軍隊を密かに動かし、ファラオに刃向かってくるのではないか。そう考えるわけです。一度疑われてしまえば、大臣の座を追われるばかりではなく、死刑になる可能性だってある。そのことをヨセフは当然考える。

そうしたらどうするのがヨセフにとって得策か。ヨセフ自ら動くのではなく、兄たちに任せておくのが一番波風が立たなくて済むはずですが、でもなぜがそうしない。そもそもヤコブはなんと遺言していたのか。29節にある。「また、ヤコブは彼らに命じた。」「彼ら」とは兄弟全員です。では、50章5節でヨセフはなんと言ったか。「父は私に誓わせて、こう申しました。」ヤコブの遺言に従うなら、ここは「私たち」と言うべきではないですか。ところがヨセフは、「私」と言っている。これはなぜか。他の十一人の兄弟を代表して、「私」と言っているのか。そうかもしれません。

でももう一つ可能性があります。もしヨセフが「私たち」と言って、それを聞いたファラオが機嫌を損ねたらどうなるか。わざわざは兄弟全員に及びます。殺されるか、そうでなくてもエジプトから追放されて、大変な苦勞を味わうかもしれない。ヨセフはそのことを考えたのではないのでしょうか。何かあっても全部自分が責任を負う。そのような覚悟です。かつて自分を奴隷としてエジプトに売った兄たちであるのに、彼らに災いが及ばないようにと、ヨセフは自分のいのちを犠牲にしようとした。それが彼の信仰でした。

父親のなきがらお葬るために、なぜそこまでする必要があるのでしょう。いや、その前にヤコブは考えなかったのか。自分たちはエジプトで外国人寄留者という立場で肩身を狭くしながら生活しているのです。カナンの地にあるマクペラの洞穴の葬ることがどんなに危険でやっかいなことなのか想像しなかったのか。どんなに年老いていたとは言え、ヤコブだってそのことは分かっていたでしょ

う。それでもマクペラの洞穴に葬られることにこだわら、ヨセフもいのちをかけるほどこだわら、それはなぜか。そのことを最後に考えます。

3 神との契約を信じて

1) ヤコブ契約

ヤコブが神からどのような契約をいただいているのかを思い起こします。28章13節。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。」そして同じ章の15節。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

彼が兄エサウからのがれてラバンの所へ向かう途中、荒野で石を枕にして寝ていたときに夢の中で現れた主が語ってくださったことば。ラバンに何度もだまされても、それでも耐えて辛抱できたのはこの約束があったからでしょう。その忍耐を通して、彼は信仰者として練られ、やがて兄との和解していったのですから、彼の人生を決定的に変えた大切な神のことばです。ヤコブは地上の生涯を閉じる最期の時まで、この約束を忘れるはずはありません。

2) 祝福を受け継ぐ

、神のことばによれば、彼はカナンの地に戻ることになっているのです。自分たちはエジプトで寄留者として生きざるを得ない、難し立場にあったとしても、それでも神は契約を成し遂げてくださる。それを信じてヤコブはこのように遺言しました。

父ヤコブに約束してくださった神の契約のことばを、ヨセフも信じていく。なぜ信じられたのか。自分が歩んできた道を振り返れば、神はヨセフをも顧みてくださったとわかったからではないでしょうか。兄たちに奴隷として売られる者であったのに、エジプトで高い地位に就くことができたのはなぜか。エジプトで兄たちと再会し、あれほど憎んでいた兄たちと和解することができたのはなぜか。父とはもう会えないと諦めていたのに、再会することができたのはどうしてか。不思議なことだらけ。確かに神はヨセフとともにおられたとしか考えられません。父ヤコブがいただいた神の祝福を自分もいただいていた。それは、自分の

いのちをかけてもよいほどの価値のある神の祝福
だったのです。

3) はるかにそれを見て喜び迎える

アブラハムがカナンの地にヒッタイト人エフロンから買い取った私有の墓地、マクベラの洞穴。ヤコブの息子たちはそこへ父ヤコブのなきがらを葬り、エジプトに帰ります。しかし、神のご計画はそこで終わったのではありません。やがて彼らの子孫たちはエジプトから救い出されて、カナンの地に戻されます。やがて神がそうしてくださることを信じていたヨセフは、自分のなきがらを必ずカナン
の地に戻すようにと遺言し、ヨシュアの時代にその遺言は果たされていきました。

彼らの信仰についてヘブル人への手紙11章13節にこう書かれています。「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」

アブラハムが地上において所有できた土地は皮肉なことですが、お墓だけでした。それなのにアブラハムもヤコブもそしてヨセフも、神の約束を信じ続ける。「あなたをこの地に連れ帰る。」やがて神の約束の地を相続することになる。

ヤコブに語られた約束は、私たちにもそのまま語られています。私たちは、いつか墓に葬られる日が来ます。しかし主イエスが三日目に墓からよみがえってくださったように、主が再び来られる日に、私たちも墓からよみがえり、いまは目に見えない天の故郷に迎えられていく。私たちにとって墓は、神の約束が果たされる希望の場所である。そのことを信じて喜びながら墓を建てようとしている、そのことを改めて確認したいと思います。